

## 2023年1月1日付けの新聞紙面から

◇82年前の教訓から何ら学んでいない国、政府。そこに私たちは暮らしている。  
三陸新報（宮城県気仙沼市）2023年1月1日コラム「万有流転」

「東日本大震災から13年目を迎える。国民は「復興特別税」を納めつつ、復興にまい進した年月でもある。しかるに、「防衛費」にその特別税も含め「検討する」とは何事か▼新年早々、めでたくない話で恐縮するが、昨年末は突出した「防衛関連経費」の増額に揺れた。今、「戦争」などというものが起きれば日本はひとたまりもないことは、太平洋戦争を振り返っても明白だ▼82年前の教訓から何ら学んでいない国、政府。そこに私たちは暮らしている。大震災で被災した市町村は多くの善意にも助けられ、何とか歩き続けてきたが、本当の復興はまだ先である▼気仙沼市、南三陸町もその範疇にあり、大震災後のさまざまにも対応し、より良き復興を目指している。正解のない課題も少なくないが、考え、議論し、答えを探していく作業は続いてきた▼今年「卯年」。ウサギのように、跳躍、向上の年であり、新しいことに挑戦する年でもあるとされる。しかしそれは、己の心に問い、人の声を聞き、よくよく考えて決断することであろう▼良くないことを数えれば、深みにはまる。日々の幸せを数え、明るく過ごす年としたい。本年もよろしくお願い致します。

### 萬有流転

## ◇ウサギとカメ

信濃毎日新聞（長野市）2023年1月1日コラム「斜面」

うさぎ年を迎えると笑い話を思い出す。「兎に角」を「ウサギにツノ」と読み上げてしまったと、学生時代に友人が頭をかいていた。受験勉強では出合わぬ読み方か。今の筆者にしても同じ。常識を知らずに赤面する場面は数知れない◆「兎角亀毛」は実在しないことを例えた言葉。ウサギに角などないし、カメの甲羅にも毛は生えない。世界中が知っているイソップの寓話、ウサギとカメの競争だつてあり得ない話だ。日本では近代化してゆき明治以降の学校で道徳の教材にされてきた◆才能があっても他者を侮り、油断して負けたウサギ。能力で及ばないが、着実に歩んで不利な戦いに勝ったカメ。敗北も勝利も、心構えと努力次第だという「神話」を学校も家庭も教え込んできた。そういう面もあるだろうが、競争ばかり強いられ、精神論を説かれるのはつらい◆教育学者の府川源一郎さんは大学生に寓話の「書き換え」をさせたという。ウサギがカメを待って一緒にゴールしたり、協力し合って仲良くなったり、寝たふりをしたウサギにカメが感謝したり。現代の若者らは競争と勝敗に重きを置かない話を作った◆大事なのは視野の狭い勝敗観でなく、互いに関係しながら個性を発揮して生きることだと府川さんは著書に書いている。目の前の結果を性急に求め、見識を広げる機会もなく、互いを理解する余裕を失ってこなかったか。効率とスピード重視の世情を離れ、ゴロンと天井を仰ぎ見る寝正月。

### 斜面

2023.1.1

## コラムの筆者から

元日の「斜面」は干支（えと）を絡めることが少なくありません。

獲物を狩る爪も牙もなく、長い耳で危険を察知し、素早く逃げるウサギ。世界各地の民話では悪知恵が働く者として描かれることも多い動物です。

生態などを調べて題材を探しましたが、お正月の話題と

してはどうもしっくりきません。

「ウサギとカメ」を軸に教育と社会を論じた府川さんの『ウサギとカメ』の読書文化史 イソップ寓話の受容と『競争』（勉誠出版）が興味深く、自分の来し方も反省しながら、年初の「斜面」を書きました。

（論説副主幹 五十嵐裕）

◇吉永小百合さんが手渡したい思い  
東京新聞ほか 2023年1月1日  
共同通信配信，各地の地方紙に掲載

## 大変な問題をどんどん決めていこうとした動き 母べえの時代に戻ってしまうんじゃないかと

### 戦争しない国、守りたい

吉永小百合さんその思い



大事なのは、力に頼らず、意見を出し合っていくこと

日本を代表する俳優、吉永小百合さん。77歳の今もトップスターとして輝き、核兵器のない世界や平和を願う活動にも積極的に取り組んでいる。

ロシアのウクライナ侵攻や新型コロナウイルス禍。暗い影が世界を覆う中、私たちは次代のために何ができるのだろうか。未来に手渡したい思いを吉永さんに聞いた一。

次ページにつづく

### 「こんにちは、母さん」で「母」3部作に

山田洋次監督、吉永小百合さん主演で、今年の9月1日、全国公開予定の最新作。吉永さんにとって123本目の出演映画となる。

劇作家、永井愛さんの人気戯曲が原作。東京の下町を舞台に、吉永さん、大泉洋さ

んが演じる母と息子、周囲の人々の人間模様を描く。東京大空襲に触れる場面もある。

吉永さんの山田監督作品への出演は「男はつらいよ 柴又慕情」を皮切りに、これで6作目。今作で「母べえ」「母と暮せば」に続く山田・吉永コンビの「母」3部作になる。

私が東京・渋谷で生まれたのは1945年3月13日、一晩で10万人以上が亡くなったとされる東京大空襲の3日後です。

両親が必死に守ってくれたおかげで無事に生まれることができました。その年の夏に終戦を迎えたので、自分に戦争体験があるとは言えません。

でも、俳優として、広島、長崎の原爆や沖縄戦を描いた作品に出演し、さまざまなことを学んできました。そうした方々の思いを伝えなければいけないという気持ちで、1986年に原爆詩の朗読を始め、その後、東日本大震災の被災地や沖縄の方の詩も取り上げ、ライブワークにしています。

### 半藤一利さんの言葉

「ずっと戦後であってほしい」「戦争だけは絶対に始めてはいけない」。2021年にお「く」になりました作家、半藤一利さんの言葉です。菊池寛賞を一緒

に受賞したのがきっかけでお話を伺い、私にとつては師匠のような存在でした。

東京大空襲の夜、中学生だった半藤さんが火の海の中、川に飛び込み、船頭さんに助けられ一命を取り留めた体験も伺いました。戦争は持たせたいじゃなくて、一般の市民がたくさん犠牲になります。ロシアのウクライナ侵攻でも、それを改めて感じました。

半藤さんの言葉には、日本は二度と戦争をしないと世界に向かって宣言したのだから「ずっと戦後」のはずだ、戦前や戦中という時代はもう絶対に迎えてはならないという強い思いがあると思います。私も同感です。

### 時代戻らないか心配

怖いのは、昨年末、サッカーのワールドカップ（W杯）で日本中が沸き返っていた時期に、敵基地攻撃能力や防衛費増額という大変な問題を、みんなで考える

んじゃないか、とんてん決めていくこととした動きです。

その頃私は、山田洋次監督の新作「こんには、母さん」の撮影中でしたが、山田さんと以前に撮った「母べえ」の時代に戻ってしまっんじゃないか、と心配でした。「母べえ」は1940年の東京が舞台、文学者の父親が思想犯として特高警察に逮捕される話です。

今、日本だけでなく世界各国で、異なる意見を力で抑え込もうとする傾向が目立ちますが、大事なものは、力に頼らず、みんなで意見を出し合っていくことだと思います。知恵を絞って、人々がいいかたちで生きていける道を探したいですね。

### 迷った時にはトライ

2020年からのコロナ禍では、映画の現場もこれまで経験したことがないほどのストレスがかかりました。やっこの思いで完成した作品を、映画館で上映で

きなかった時は、本当にかっかりしました。私にとつて、映画はかけがえのないもので、一観客としても、映画館で見た映画を誰かと語り合つのがとても大事な時間だった、ということを再認識しました。

いつまで第一線にいられるのか、と思うこともありますが、できる限りのことはやろうと決めています。後ろ向きになれば、終わってしまう気がします。迷った時はいつも「やめるよりはトライしてみよう」と心がけてきたからです。

最近、渡辺貞夫さんのコンサートに行き、「イマジジン」や「花は咲く」の演奏に込めた子どもたちへの思いや平和への祈りに感動しました。89歳の渡辺さんが、そうやって発信し続けている。山田監督は91歳ですよ。そうした方たちを見ると、私ももっとしっかりしなければと思います。

（聞き手は共同通信編集委員・立花珠樹）

2023年が開けた。今年は卯(う)年だ。卯(うさぎ)は穏やかで温厚な性質から「家内安全」その跳躍する姿から「飛躍」、「向上」を象徴するものとして親しまれ、新しいことに挑戦するのに最適な年とも言われている。

### ウィズコロナ

昨年は、長年流行している新型コロナウイルスとの新たな付き合い方が始まった年だった。第7波が収束した9月以降、陽性者の全数届け出が見直され、重症化のリスクが高い高齢者などのみの把握となった。コロナの感染症法上の位置づけについて今年春の2類相当から季節性インフルエンザと同等の5類への移行に向け検討も始まっている。飲食や移動に制限がなくなり、ダメージを受け続けていた観光や飲食業など経済も復活の兆しを見せている。県内でも第8波が始

まっているのが気掛かりだが、回復基調が維持されることを期待したい。  
また、今年こそは、コロナで中止、規模縮小を余儀なくされてきた四カ字を中心とする各地区の豊年祭やハーリーなどの伝統行事も再開が期待される。ウィズコロナ(コロナと共存)時代の実質的なスタートの年として、普段通りの日常が戻ることを期待したい。

94万人からピークとなった19年には147万人余にまで増加。20年以降は新型コロナウイルスの影響で大幅な減少に転じている。だが、コロナ収束により、観光は回復基調となり、入城客もコロナ前まで回復している。昨年末から大型クルーズ船の奇港も再開しており、今期は、コロナの影響で旅行を制限されてきた旅行者の観光需要の増加が見込まれ、航空会社の就航

## 新たな挑戦の年に

—観光、経済回復に期待—

### 新空港開港10年

石垣市の新たな玄関口として2013年3月7日に開港した南ぬ島石垣空港。今年で開港10年の節目を迎える。コンテナ搭載が可能な中型機が就航可能な2000級の滑走路を有し、八重山観光の発展に貢献してきた。観光入城客(海路含む)は開港年の2013年の約

便数の回復とともに観光入城の伸びも期待されている。  
一方、休止状態となっている海外路線も、国際線ターミナルが拡充され、受け入れ態勢が整った。後は、路線再開を待たせた。

### 軍事要塞化の危機

昨年、与那国島行われた陸自と米軍の

共同演習「キーン・ソード23」で陸自の先頭車両が公道を走行した。この日米の共同演習を中山義隆石垣市長は容認した。石垣島で整備が進んでいる石垣駐屯地は3月に完成が予定され、ミサイル部隊が配置される見通しだ。そうすると、この駐屯地を使った日米共同演習が行われる可能性がある。必然的に南ぬ島石垣空港や石垣港も利用される可能性がある。これが常態化することで軍事要塞よう(うさい)化が進むことが懸念されている。

国は、国内総生産(GDP)の約10%程度で支出してきた防衛費を2027年度以降、2倍に拡充し、これまで守り続けてきた「専守防衛」から、敵基地攻撃を可能とする。しかも不足する1兆円を増税でまかなう方針だ。石垣駐屯地にも敵基地攻撃用のミサイルが配備される恐れもある。

平和が不可欠な観光と敵基地を攻撃するかもしれない駐屯地の島内での同居にはどうしても違和感を覚える。



# 社説

## 危機の時代に

行動制限のない年の瀬、県内の観光施設や大型スーパー、正月用品を扱う市場は、観光客や買い物客で久しぶりのにぎわいを見せた。

2023年、今年はこのように1年になるだろうか。

新型コロナウイルスのパンデミックが起きる前の普段の生活が平和の代名詞のように感じられるのは、ロシアの攻撃にさらされるウクライナの人々の窮状をメディアで毎日のように見ているからだ。

ウクライナ侵攻によって世界は一変した。

岸田文雄首相は「ウクライナは明日の東アジアかもしれない」と防衛力の大幅な増強に乗り出した。

反撃能力（敵基地攻撃能力）



平和の礎の中心部分にある「平和の火」＝2022年6月23日

# もつと「平和の文化」を

買つことである。

岸田首相は昨年12月、東京都内で開かれた講演会で、そうあけすけに説明した。

首相は東アジアの将来をどのように構想しているのだろうか。それがまったく伝わってこない。

衆議院が本会議で復帰50年に関する決議案を賛成多数で

可決したのは、昨年4月28日のことである。「平和創造の拠点」としての沖縄をつくる」ことが決議案の表題に盛り込まれている。

私たちは「平和創造の拠点」としての沖縄をつくる「こと」を歓迎する。けれども、それがどのような内容のものか、具体的なことは書かれていない。

理由から見てきた政府の自民党の変わらない姿勢である。

政府は敵基地攻撃能力の保有後も「平和国家」や「専守防衛」の考えは変わらない、と主張する。

口先で唱えるだけで実質を伴わない主張のことを「お題目」と呼ぶが、戦後日本のアイデンティティ

とを宣言している。

今、必要なのは憲法制定時の志を生かしていく具体的な取り組みだ。

敵味方の別なく沖縄戦で亡くなった人たちの名を刻む「平和の礎」。そこには二度と戦争を起さしてはならないという沖縄の人々の祈念が刻み込まれている。

昨年6月、市民グループが礎に刻まれた戦没者全員の名前を読み上げる取り組みを行った。そうやって一人一人のかけがえのない命、戦場で失われてしまった命に触れているのである。

そのようなことの積み重ねを通して、沖縄に「平和の文化」を根付かせたい。

私たちは今年を「非戦・平和創造元年」と位置付け、紙面を通して戦争を回避するための機運づくりを進めていきたい。